



アメリカ童話から

14

松原至大

ピリーの赤い長ぐつ

ある土曜日の朝、ピリー君はベットから起きると、一足の赤い長ぐつが、いつもの毛のスリッパと並べてあるのに気がつきました。うれしくて思わずとびあがりしました。それは、この冬ほしくてならなかつたものでしたから。

まず一つをはいて、しつかりとはいてから、もう一つの中に、足を突つてもうとすると、まるまるとふとつた足指に、なにかさわるものがあります。手を入れてみると、一枚のカードがはいつていました。引き出して、よく見ると、こう書いてありました。

赤い長ぐつは、坊くのが大好き。

赤い長ぐつは、遊ぶのが大好き。

赤い長ぐつは、走るのが大好き。

毎日お使いへ。

ピリー君はうれしくて、うれしくて、もう一度読み返えしました。わかつたことは、それに節がついていて、歌えるということでありました。お服を着ながら、長ぐつをはきながら、節おもしろく歌いました。

お父さんもその長ぐつを御覧になると、ピリー君と同じように、びつくりなさいました。それからお母さんは——そうでした。お母さんは、長ぐつのことをよく御存じだったのですよ。

「どなたにか、お礼を申し上げなければなりませんよ。今にじき、あなたにもわかりましよう。」と、お母さんはおつしやいました。目をばちばちなさりながら。

朝のお食事中、ピリー君はだれにお礼を申し上げたらよいのか、と考えていました。けれども、このような赤い長ぐつを下さる人が、どうしても思いつきません。

考えながら、ゆつくりゆつくり飲んでいたオレンジ・ジュースの最後の一しずくをすすつてしまうと、ピリー君はお母さんに申し上げました。

「赤い長ぐつは、ゆくののが大好き。なにかほくに、出来ることはありませんか？」

「考えてみましょう。」と、お母さんはおつしやいましたが、やがてにこにこなさつて、

「ああ、そう、そう、炬のたき木を少しちようだいな。」と、お言ひになりました。

ピリー君は、ジャケツを着て、キャツプをかぶりました。お母さんは、バスケットをおだしになりました。やがてピリー君は、雪を踏みしめ、雪を踏みしめ、まき小屋へ行きました。

バスケットにまきをいつぱい詰めると、入口のところ運んで、

「なにかほかに、あることはありませんか、お母さん？」と元気な声で、ピリー君は言いました。

「ありがとう。もうありませんよ。」と、お母さんがお答えになりました。

そこでピリー君は、歌をうたいながら、通りの方へはねて行きました。

「赤い長ぐつは、遊ぶのが大好き。」

通りのむこうにいるビター君とポーリ君のところへ、遊びに行くのでした。

間もなく二人が、お家からとび出してきました。暖かそうなコートにくるまつて、少し前までは、ビリー君のと同じように、びかびかしていた長ぐつをはいて。

「いいだろう、ぼくも長ぐつがあるんだよ。見ておくれよ。けさベットのそばで見つけたんだよ。でも、どなたが下さつたのか、ぼく、知らないんだよ。君たち、知つてない?」

ビター君とポーリ君は、頭をふりました。ビリー君は、長ぐつの中にあつた歌をきかせました。二人もじきに覚えて、いつしよに歌いました。

「ぼく、歩いてきたから、今は遊び時間だよ。」こう言つて、ビリー君はうれしそうでした。

なんという楽しい時でしたらう。今日の午前中は、いつもとちがつて、早く過ぎてしまつたので、お母さんがおひるのお食事にお呼びになつた時は、ビリー君は自分の耳がうそのようでありました。

お台所へかけこんで行くと、お母さんが一枚のおさらをナフキンで、包んでいらつしやいました。

「ちよつと待つて下さるわねえ? わたくし、このできたてのロールをお祖母さまのところへ、お届けをしてくる間。」と、お母さんがお聞きになりました。

ビリー君はなにかを思い出しました。

「ぼくを、お祖母ちやまのところへやつて下さい。赤い長ぐつは、毎日お使いに走つていきますよ。」

と、ビリー君は上手にいました。お母さんは、お笑ひになりました。

「おや、そう。」こうおつしやつて、ドアを開けて下さいました。

新しい長ぐつをはいて、雪の上を歩くビリー君の足は、フェアリのように軽々と見えました。

「ぼく、長ぐつを頂いて、だれにお礼をいつたらいいか知りたいなあ。お祖母ちやまに聞いてみよう。きつと御存じだよ。」ピリー君は石段を音たててあがりながら、こういいました。

リリン、ドアのベルがなりました。

「まあ、まあ、ピリーちゃんじゃありませんか？いつものように、かけ足のお使いで。寒いから、早くおはいりなさい。」お祖母さまは、たここにこです。

ピリー君は、ホールの中にはいつて、ロールをお祖母さまにわたしました。

「まあ、いいにおい。」と、お祖母さまはお鼻をならしました。

「ぼく、ゆつくりできない。けど、ぼくの新しい長ぐつは見下さい。」

ピリー君は茶色の目を輝かしながら、こういいました。

お祖母さまは、赤い長ぐつをのぞきました。

「お祖母ちやまは、これをだれが下さつたのか、知つてませんか？」ピリー君がたづねました。

その時、お祖母さまの目が、ちよつとの間びかびかしました。

「考えてみましょう。」

と、おつしやつてからお祖母さまはちよつと言葉をお切りになつて、またすぐおつしやいました。

「あなたの長ぐつは、仇いたり、遊んだり、毎日かけてお使いに行つたりしますか？」

ピリー君は、うなずきました。

「それなら、世界で一番よいお手伝いのお使い番に、わたくしが買つて上げたのにちがいありませんよ。」

こうお答えになつて、お祖母さまはくすくすお笑いになりました。(アイダ・タイスン・ワグナー女史の作による)